

Title	『原始』と加藤一夫：『原始』の位置と総目次
Sub Title	Primitivity (Genshi) and Kazuo Katoh : covering all contents of primitivity
Author	小松, 隆二
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1985
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.78, No.5 (1985. 12) ,p.628(178)- 638(188)
JaLC DOI	10.14991/001.19851201-0178
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19851201-0178

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



『原始』と加藤一夫

—『原始』の位置と総目次—

小松隆二

はじめに

本誌前号において、私は加藤一夫の生涯を素描した。これまで、加藤については、その名前の大きさに比し、生涯さえ、正確にはあとづけられていなかった。とりわけ青少年期の足跡については、正確さも詳細さも欠けていた。それを補ったのが前号の「土の叫び地の囁き——加藤一夫の生涯と思想——」である。

加藤にかんしては、著訳書・論文にしても、また関係した新聞・雑誌にしても、生涯と同様にその全貌は明らかになっていない。現在でも、それをはたすことは、きわめてむずかしい。執筆量が多いこと、それに弾圧の対象になりやすい機関紙誌への執筆も多いことが、完全とはいかないまでも、一応形の整った著作リストをつくることさえ困難にしている。戦前の文芸・思想関係の機関紙誌、そしてそれらの内容・総目次まで広く明らかにした小田切進編『現代日本文芸総覧』(上中下補完、明治文獻・1968~78年)でさえも、加藤のかかわったものにかんしては、主要な『科学と文芸』『原始』『大地に立つ』のどれをも、取りあげることができなかつたほどである。

本号では、前号で示したように、そのうち『原始』を取りあげることにする。ただ『原始』については、文学(史)の方面から、紅野敏郎が光をあてている。『原始』の概要、とりわけ「無産階級文芸雑誌」の重みをもつにいたるプロセスを紹介した『「無産階級文芸誌」への移行——加藤一夫『原始』の検討——』(『学術研究——総合編——』20号、早稲田大学教育学部、1971年)がそれである。

そこで、本稿では紅野がふれた文学史的側面はできるだけ避けて、それ以外の問題点を取りだしつつ、

『原始』の総目次を紹介することにした。

1. 『原始』の創刊

『原始』創刊号(1925年1月1日)は、体裁が菊判雑誌型・29頁(広告頁を除く)、定価が20銭(送料は5厘)であった。「加藤一夫個人雑誌」として出発する。発行所は原始社(兵庫県武庫郡芦屋643)、印刷所は早稲田印刷株式会社(東京市牛込区早稲田鶴巻町362)であった。

印刷が東京で行われたのは、印刷を春秋社の協力によったためである。『原始』は、のちの『大地に立つ』ほどではないが、春秋社と神田豊穂の援助を少なからずうけて出発している。

『原始』は、『自由人』のような運動機関誌ではないため、無料進呈は一切せず、すべて購読方式をとった。それでも購読料のみでは雑誌の維持が困難であった。加藤はくり返し、いかに『原始』と自らの生活の維持・両立がむずかしいかを読者に訴え、購読料やカンパをよびかけている。当然、個人誌の『原始』に力を注げば、収入を得るための一般・商業紙誌への執筆が制限されるので、加藤は『原始』の刊行と家計維持の両立にも苦しんだ。そのため、『原始』の刊行では、神田に負うところが少なくなつたのである。

『原始』を創刊した1925年1月という、加藤が関東大震災直後の混乱の中で東京を追放になってから、およそ1年4カ月たった時である。大震災前まで、労働運動・社会主義運動における「アナ・ボル対立」の一方の陣営を担ったアナキズムは、後退期に入っていた。「アナ・ボル」にかわって、同じ社会主義の中で「社会民主主義とマルクス主義」の対立時代が始まっていたのである。

もっとも衰退期とはいえ、この時期にも『労働運

『原始』と加藤一夫

動』はじめ、労働運動・思想運動関係のアナキズム系機関紙誌は、長くは続かないが、くり返し刊行されている。その点で、昭和期以降とは逆に、大正末のアナキズム系でとくに弱いのが文芸領域の活動であった。そこに投ぜられたのが、『原始』であった。いうなれば、『原始』は、加藤自身もその陣営に属していたアナキズムの衰退期に、社会運動全般でもまだ弱い領域であった文芸を主たる課題に出発したことになる。

2. 『原始』の意味するもの

加藤は何故「原始」のタイトルを使用したのか。それにどのような意味をもたせようとしたのか。それについては、創刊号でも、またその後も、しばらくはふれようとしな。わずかに第1巻2号の「ダダイストの心理」において、「更生の新しい力をもつ異邦人」であるダダイスト＝「原始的な現実人」にふれたり、また第1巻7号「読んだものゝ中より」において、「本能は野蛮人である。原始人である。だが、その野蛮人の欲求は人間の最高の理想と一致するものではないか」などと、間接的に「原始」のもつ意味を問いかけているのみである。

それを正面から取りあげるのは、第2巻1号の「原始に還れ」にいたってからである。

そこで加藤は次のようにいう。原始とは、出発と到着、初めと終り、素朴と文化、そのいずれでもあり、いずれでもない。原始人の生活は「極端に文化された野蛮人」のそれである。いうなれば、「自足円満」「絶対」「虚無」、これが原始である。それは、都会的なものを破壊して、再び「土・自然・本来の郷土に還る生活」によって達成される。「土は一切の科学の母」だからである。彼はその主張を次のように結んでいる。

『原始』は何のために生れたか。生活に於いても、芸術に於いても、哲学に於いても、此の新たなるそして千古不変の真理を伝ふべく、野に呼ぶ声とならんがためである。声は既にあがって居る。」

このように加藤のいう「原始」とは、たんに古＝原始に戻ることでなく、またそれを超えた文化・文明に抛ることでもない。現在は、古の本能と直覚、それを超えた近代の法則と知識と科学が融合せず、徒らに人間とその生活に重荷を負わせ、疲労せしめ、自由・独立・創造性を失わせるだけになっている。「母なる大地」「土」を離れた結果が、そのような人間社会の墮落、疲労、そして独立心の欠落を生んでいる、と、

彼は考える。

すでにこの「原始」の命名の論旨に、また『原始』に掲載される数々の主張の中に、ほどなく加藤が傾斜する農本主義を想起せしめるものがうかがえることは、注意しておいてよいであろう。

3. 『原始』の創刊以後

1925年1月に出発した『原始』は、終刊の1927年4月まで28冊が世に送り出される。その間、いくつか重要な変遷もたどられる。

まず担い手のひろがりにかかわる『原始』の性格をみると、創刊号から第2巻6号(1926年6月)までは「加藤一夫個人雑誌」、2巻7号(1926年7月)から12号(1926年12月)までは「加藤一夫編輯」、そのうち2巻12号のみは「加藤一夫編輯」に加えて「文芸雑誌」、残りの第3巻1号(1927年1月)から4号(1927年4月)までが「無産階級文芸雑誌」が、加藤自身の手で『原始』というタイトルの傍らに付される。このようにサブ・タイトルが個人雑誌から個人編集、さらに文芸雑誌に変わることは、たんに執筆陣が一人から多勢に拡大するだけでなく、編集にも加藤以外の手が入っていくことを意味している。

以上の外に、とくに表紙に特集タイトルが付されることがある。第1巻5号の「農村問題」「土の芸術」、第1巻7号の「7月特別号」、第2巻1号の「一周年記念倍大号」、第2巻8号の小特集「『死の懺悔』読後の印象」、第2巻11号の「創作号」が、それである。

発行所は「原始社」、発行編輯者印刷者は「加藤一夫」と28号を通じて変わらないが、発行地は変わる。創刊号と第2号は兵庫県武庫郡芦屋643、3号(1925年3月)と4号は芦屋559(595の誤植と思われる)、5号(1925年5月)から8号(1925年8月)までは芦屋595、9号(1925年9月)から第3巻4号(1927年4月)までは東京府下武蔵野村吉祥寺2757である。

頁数は29頁(創刊号)から65頁(第3巻1号)の間に不定である。それにあわせて、定価も通常は20銭、60頁前後に増頁のときは、25銭となっている。「無産階級文芸雑誌」となる第3巻1～4号は56～65頁とすべて厚く、定価も25銭となっている。

印刷所は、創刊号と第2号は早稲田印刷株式会社(東京市牛込区早稲田鶴巻町362)、3号から第2巻1号までは小島印刷所(東京市小石川区初音町8)、第2巻2号から4号までは白土印刷所(東京市神田区末広町18)、第

2巻5号から12号までは清揚社(東京市牛込区弁天町157)、それから第3巻の1~4号は早稲田印刷株式会社に戻っている。

この間、支部も各地に設けられ、懇談会・交流会などが開かれている。それに加藤が出むくこともあった。1926年初めで、支部として次の17カ所が報告されている(第2巻4号)。

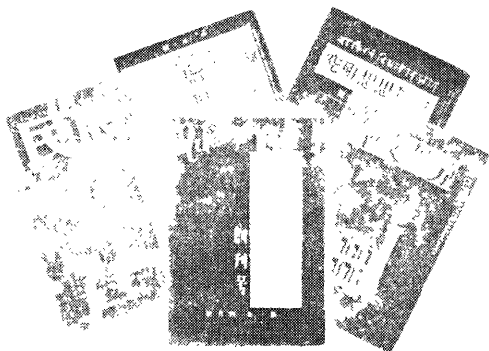
①東京市外	坪田譲治方
②同	芳賀 融方
③岡山市	森田綾夫方
④福島県	佐藤幸太郎方
⑤広島市	大前芳成方
⑥埼玉県	中島 進方
⑦静岡県	大井 寿方
⑧和歌山県	丸山一見方
⑨茨城県	寺田紀一郎方
⑩大阪市	白井新平方
⑪同	広垣忠一方
⑫同	宇都宮四志夫方
⑬大阪府	河本乾次方
⑭豊橋市	川合陸郎方
⑮呉市	立花登滋方
⑯長岡市	中沢臨川方
⑰東京市	竹内愛国方

4. 『原始』の特徴

性格や役割をふくめ、『原始』の特徴をいくつか取りあげてみよう。

まず第1に、一貫してアナキズムの色彩が濃く浮きでていることである。関東大震災後は、混沌とした世相にも似て、加藤は自らの思想状況も混沌としていることを自覚する。それに対し、自らの立脚点・居場所や目標を確認すべく、白紙に戻って「巡礼記行文」を書くつもりで、取りくんだのが、『原始』であった。

にもかかわらず、創刊号の「私は一個のニヒリストである……。私はまた一個のアナキストである……。或は、さうした傾向をもったインテリゲンツィアである……。」(「発刊に際して」)といい、また「カアベンタアヤルクリュウヤ石川三四郎なその生活、その心境が今、僕にもわかって来たのだ。静に、根強いものを僕も創造しよう。……世人を相手に、評判や名声や利用やを気にしないで、自分の仕事を自分一人でコツコツとやり度いのだ。」(「雑記」)という中に、当初から明



加藤または『原始』の兄弟誌

快にアナキスティックな視点に立脚していたことがうかがえる。

しかも「巡礼記行」が号を重ねるにつれて、一層アナキズムに傾斜していくのは、その協力者・執筆陣をみても、またアナキストと文芸戦線派=プロレタリア文学派との論争において、『原始』があげて前者の陣営に立つ論陣をはるのをみても、一層明らかになっていく。とりわけ1926年の後半からは、『原始』が文芸における「アナ・ボル」論争の先陣を切る役割を担うかのように、アナキズム文学の視点を明白にしていく。いうまでもなく文芸・芸術における目的意識性および文芸・芸術を政治やイデオロギーの従属的地位におくことを否定し、その自然発生性・独自性を強調する視点である。

なお加藤が「芦屋より」「吉祥寺より」等で紹介する著書・機関紙誌にしても、アナキスト・自由人のものが多いこと、自らも執筆する『虚無思想研究』や『虚無思想』を兄弟分とよんでいることも記憶しておいてよいであろう。

第2に、文芸が重要な柱になりつつけることである。この頃加藤は日本無産派芸術連盟などにも参加していたが、しばらくは文芸や哲学や思想が雑居している。しかしその中で、核となっているのは文芸であった。第2巻11号の「吉祥寺より」では、加藤は「行く行く原始にもっと文芸的色彩を濃厚にし新しい運動の烽火としたい」とまでいっている。それを実行に移すように、第3巻に入ると「無産階級文芸雑誌」をサブタイトルにまで用いる。もっとも、それに対しては「雑学の大家」「居候の名人」こと占部哲次郎からは「文芸雑誌だけは勘弁してくれ」(「こんとらぢーれ」『原始』第3巻4号)とクレームをつけられるが。

『原始』と加藤一夫

それに、文芸を核とするところから、労働運動や思想運動にかんする記事・論説が極端に少ないことも了解されよう。労働・思想運動の原理的な究明をなす論説なら掲載されるが、現時の運動にかんするものは、極端に限られる。だから近藤憲二、岩佐作太郎はじめ、当時のアナキズム系活動家、組合関係者も、『原始』にはほとんど登場しない。活動家の一人で神学校で加藤の後輩にあたる八太舟三、あるいは石川三四郎が登場するときも、文芸論やアナキズムの原理的展開をなす主張をひきさげでの登場となる。

もっとも、加藤あるいは編集協力者たちが近藤たちを排除したわけではない。次の記事にもみられるように、むしろ石川や近藤らの参加をのぞんでいたふしもある。「近藤憲二、岩佐作太郎、高橋新吉、椎名其二、宮嶋資夫、下中弥三郎諸氏に今月は是非書いて貰ふ積りであったが、こちらの不用意や、直接に逢って意を通ずることの出来なかつたりして、とうとう締切に間に合はなかつたことは甚だ残念とする」(『編集後記』『原始』第2巻9号)。これはその後も実現されないが、そこには『原始』の性格の変化が看取されるであろう。

第3に、『原始』には、一貫してテロリストないしは生命がけの行為に走る青年アナキストたちに対する加藤のあつい思いが感じられることである。古田大次郎、中浜哲、村木源次郎、後藤藤太郎に対しては、「追悼」とは銘うってはいないが、明らかに追悼特集といってよい扱いをしている(第1巻3号、12号、第2巻8号)。また古田や後藤、さらには河合康左右、朴烈、金子文子、和田久太郎らについても、くり返し言及している。そのうちのいくつかを引用すれば、加藤のあつい思いがよく理解できるであろう。

「僕は10日と15日の両日、面会に行った。古田君の首がとぶ日までには今一度最後の別れに行つて来るつもりで居る。恐らくそれについては諸君に報告したくても、何も出来ないであろう。ただ、古田君は非常に澄み渡った楽々とした気持で居ると云ふこと位はこゝに記しておいても差支えもなからう。」(第1巻10号)

「ある死刑囚は秋の自然に慣れながら死んだ。彼は願はくば秋に死にたいと云つて居た。そして秋のやうに寂しくしかし落着いて死んでしまった。」(第1巻11号)

「私は断言する。近頃読んだものうちで、古田大次郎君の『死の懺悔』と文子さんの此の自叙伝とほど、私の心を動かしたものはないと。……」(第2巻

9号)

さらに古田については、「訣別」(第1巻11号)や「死の出発」(第1巻12号)など、創作にまで筆をすすめていることがとくに興味をひくであろう。

第4に、新人の発掘と登用に少なからず貢献していることである。百瀬二郎、本間巷一郎、江森盛弥、山中映村たちの登用がそれである。とくに百瀬については「巻頭を飾った百瀬二郎君のスタイルネルの政治思想は堂々50枚の研究論文だ。百瀬君は日本唯一のスタイルネル学者だ」(第1巻9号)といい、また江森と山中についても「今月は私は自分で何も書かなかつた。けれどもその代り茲に2人の新人の作を推薦することを得たのは私の衷心からの喜びである」(第2巻6号)とまでいっている。

第5に、いろいろの活動の中では、加藤自身は『原始』をきわめて重視していたことである。『原始』刊行前後は、創作を多くものにしてはいるが、加藤にいわせれば、それはパンのためのものであつた。それに比べて『原始』はパンのためのものではなく、従つて収入に関係なく考察や研究の成果を発表する場と考えていた。それだけに、『原始』に全力投球したのであつた。

ちなみに、加藤は第2巻1号(「吉祥寺より」)で、当時自らの仕事として取りくみたいことを「空想」として次の4点あげている。

①「パンのための長編小説を書く」こと。②エッセイなど「いゝ本の翻訳をやる」こと。③「社会の各方面を実地に踏査研究して見る」こと。④「さうした勉強や研究や考察から出たものを此の原始で発表する」こと。

その他、加藤自身も認めるように、彼は地方出身でありながら、つねに東京にひかれ、そこに落ちつく居場所も見出せる気持になるほどなのに、『原始』の刊行ではじめて「地方」の視点を意識することなどは、前号でふれたので、ここではふれない。

5. 『原始』の終刊

『原始』の終刊号は確認できないが、これまで発見されている最終号は第3巻4号(1927年4月)である。創刊号では「何時まで続くか兎に角この雑誌を出すことにした」(「雑記」という不安な気持もうかがえるが、3号雑誌に終らぬばかりか、28冊を継続刊行したことは、当時の思想・文芸運動誌としては珍しいことであつた。

った。しかも注意処分はうけたが、しばしば誌面からもうかがえるように、十分計算して発禁をうまく免れたことも、長く継続しえた理由の一つであった。

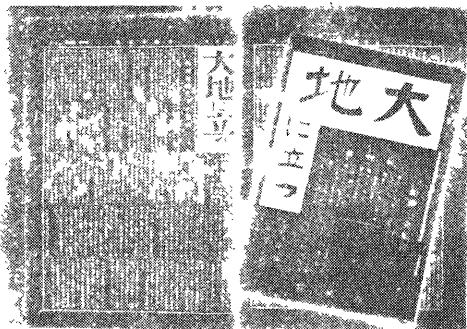
それにしても、第3巻4号は、終刊号というには余りに唐突で、終刊を思わせる記事を見出すことはまったく不可能である。むしろ「無産階級文芸雑誌」をスローガンにしてからは、頁数も増やして60頁前後を維持する態勢をつくりあげ、いかにも活気あふれる様子さえうかがえる。第3巻3号(「編輯後記」)では、「声援ますます多く、『原始』はいよいよ、根広くなる。痛快なる展開だ」といい、終刊号(「編輯後記」)では、「『原始』はいよいよ健康だ、そして健闘だ、そして1号、1号、われわれの陣屋が拡張され、鼓舞され、そして進出だ」とまでいっている。その点では文芸戦線派との対抗を意識し、プロレタリア文学論を否認する全プロレタリアの解放と芸術の独自性論を掲げて、本格的に活動しだした矢先の終刊であった。

ただ気になる点もいくつかある。その一つは第2巻の中頃から、加藤自身の筆が細っていること、とくに第3巻4号には恒例の「吉祥寺より」もなく、まったく筆をとっていないことである。もう一つは、それをうけるように第2巻の後半、たとえば2巻9号では加藤が旅行と多忙のため、荻原四郎、江森盛弥、那珂川敏、松本淳三の4人が編集にあたったのをはじめ、以後ずっとこの4人ないしはそのうちの2、3人が編集に協力し、「編輯後記」も担当していることである。

「無産階級文芸雑誌」というサブタイトルからみても、また執筆陣をみても、『原始』が途中から個人誌または個人編集の枠を超えてしまうことは明らかである。それに、時とともにアナキズム・ニヒリズムの色が一層濃くなる点で、個人誌的な性格よりも、アナキズム系の文芸を中心にした総合誌の性格をそなえていく。かくして個人誌としての特色の喪失によって、第3巻に入ると、『原始』の当初の役割が終りつつあったことも否定できないであろう。

『原始』はやがて『大地に立つ』にひきつがれるわけであるが、『大地に立つ』の刊行までの2年半を、加藤は次のように述懐する(「手紙代りに(1)『大地に立つ』創刊号、1929年10月)。

「2カ年半つづけた『原始』をやめてからと云ふもの、自分は殆ど何も書かなかった。書かなかったのは自分の思想が幾分動揺して居て決定的な何ごとも云ひ得ない状態にあるのを感じたからであった。」
もちろん、この間、加藤が何も仕事をしなかったわ



『原始』の後雑誌

けではない。先の引用のあとに彼自身がいうように、春秋社の世界大思想全集の発案・刊行など、重要な仕事も手がけている。

しかしこの期間が一つの静思・黙想期になったこともまちがいない。それほどに全力で『原始』にうちこんだともいえる。しばらくの静思・黙想なしには新たな出発もできなかったほどであったのであろう。次にくる『大地に立つ』にいたると、『原始』をおおっていたアナキズム的・ニヒリズム的な色彩はわずかしかがえなくなっていく。とりわけ号を重ねるにつれて、イデオロギー的意味でのアナキズムの色彩はほとんどみられなくなっていく。その点だけをみても、『原始』の終刊が加藤の思想と行動を転回させる契機になることがうかがえるであろう。

6. 『原始』総目次

創刊号(第1巻1号、1925年1月1日、29頁)

発刊に際して

夢

平和の抱擁^{*}(詩)

親と子(詩)

手手手手(詩)

ある日(詩)

読んだものゝ中から

—アルツイパーセフの結婚三部

—松崎実氏の長篇小説「扉」

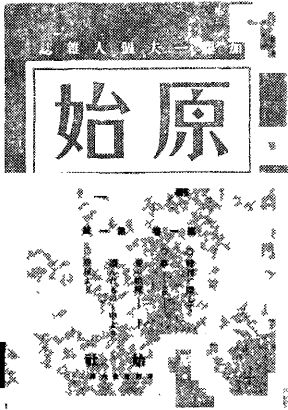
—沖野岩三郎君の「生れざりせば」

芦屋より

雑記

* 加藤自身は詩とは銘うっていない。しかし感想詩をふ

『原始』と加藤一夫



『原始』創刊号表紙

くめ、詩の形式をとっているものを、便宜のため、すべて(詩)と注記する。

第2号(第1巻2号, 1925年2月1日, 31頁)

- ダバイストの心理
- 正月六日の夜ふけ(詩)
- 燃焼(詩)
- 悩み(詩)
- 手と目くら(詩)
- 生と死と生活に就いての考察
- 読んだものの中より
- カイゼルの「瓦斯」
- 芦屋より
- 雑記

第3号(第1巻3号, 1925年3月1日, 30頁)

- 卷頭言^{*}——スティルネル
- アナアキストの死
- 雪(詩)
- 根顔(詩)
- 欲求(詩)
- 解放か自我獲得か
- 死んだ村木君と後藤君と
- 鉱夫の歌(詩, 後藤謙太郎)
- 芦屋より

* 「卷頭言」は筆者が付したものである。実際には無題である。4号も同様である。ただし5号以降は加藤自身が「卷頭言」を付している。

第4号(第1巻4号, 1925年3月1日, 30頁)^{*}

- 卷頭言——ニーチェ
- 鶯——未来の青年に献ぐ(詩)
- 社会的疾患の根本原因
- 読者欄——上田超同, 武居直人, 荒井富三郎, 宮本熊楠, 吉田金重, 土井喜久雄, 中本弥三郎, 小川龍一, 伊藤生, 外山照——
- 表現派芸術の本質
- 芦屋より

* 発行日は4月1日とすべきところを3月と誤まったものと思われる。印刷は1925年3月28日となっている。

第5号(第1巻5号, 1925年5月1日, 32頁, 「農村問題」
「土の芸術」特集)

- 卷頭言——トルストイ
- 田園の春(詩)
- 農村の衰微と都市の繁栄
- 読者欄——中山秀志, 武内初太郎, 赤石憲太郎, 坪田譲治——
- 読んだものの中から
- 白鳥省吾君の「土の芸術を語る」
- 阪中正夫君の「六月は羽搏く」
- 高橋彰三君の「白虹」
- 客と語る——芸術と社会運動——琉球とコンマーシャリズム——
- 芦屋より

第6号(第1巻6号, 1925年6月1日, 30頁)

- 卷頭語——老子
- 恋の弔鐘(詩)
- 東京よ(詩)
- 都会(詩)
- 都会と私(詩)
- メエ・デエイ(詩)
- 戦ひの日——序曲——
- 農民生活の実状^{*} 山本潔
- 読者欄——繁田浅二, 田中主税——
- 現実主義と反現実主義
- 芦屋より

* これは第5号「農村問題」特集に対する読者の書信の一つを紹介したものである。

第7号(第1巻7号, 1925年7月1日, 「7月特別号」, 42頁)

巻頭言——アルツイパーシェフ

戦ひ——戦ひの日改題——

戦ひと平和(詩)

読者欄——足立かほる, 秋田生, 中村還一, 横浜生——

読んだものの中より

——コント物及びその特質

——ニヒリスティック・ロマンティスト

——オニール戯とリアリズムの問題

——アルツイパーシェフの小説 エゴイストの革命観

芦屋より

第8号(第1巻8号, 1925年8月1日, 32頁)

巻頭言——列子

色彩のオーケストラ(詩)

戦ひ——前号につづく——

加藤一夫小論 内藤辰雄

カナリヤ 坪田譲治

貧と病との朝(詩) 後藤賢太郎

レイモントの「農民」 田中綾子

読者欄——啼いた阿呆鶏 平田千代吉, 千代春富, 由井陽, 本間生, 細田東洋馬——

芦屋より

第9号(第1巻9号, 1925年9月1日, 30頁)

巻頭言——一夫

スティルナの政治思想 百瀬二郎

無音の凱歌(詩) 松本淳三

都会の描線(詩) 安岡黒村

新居(詩) 加藤一夫

煤けた淫売婦(コンポジション・A) 壺井繁治

狂へる家(コンポジション・B) 壺井繁治

詩私感 野村吉哉

生田君の重農主義芸術論 一夫

吉祥寺より

第10号(第1巻10号, 1925年10月1日, 32頁)

虚無思想序論 加藤一夫

新感覚派芸術 加藤一夫

夜業(詩) 中村還一

春(詩)^{**}

田園小景(詩) 荻原四郎

銀座に立つ 本間巷一郎

生命賦(詩) 中山秀志

タンタンタンタツファン 高橋新吉

閑日 川崎長太郎

東京と自分と 加藤一夫

震災の頃 加藤一夫

自分の一面 加藤一夫

吉祥寺より

* 目次では「虚無思想考察序論——新感覚派芸術批判——」と一本の論説となっている。

** 中村還一作と思われる。

第11号(第1巻11号, 1925年11月1日, 32頁)

幻影と実在 一夫

訣別 加藤一夫

地の騒音 武内初太郎

調べ室(喜劇) 伊藤恣

暗い憎念(詩) 平田千代吉

追んだせ追んだせ(詩) 加藤一夫

虚無(詩) 加藤一夫

赤い陽のもとに放浪ふ(詩) 大野平凡

漆黒な出発(詩) 矢口洋之

●●(詩) 遠地輝武

雑草(詩) 今泉英夫

歴史の必然性に就て 村松正俊

個人性と社会性 加藤一夫

辻潤後援会記事^{*}

吉祥寺より

* この記事は、穴埋めに入れたと思われるが、病氣と貧困に見舞われている辻潤を援助することを目的とする後援会の結成を知らせ、資金カンパをよびかけたものである。

第12号(第1巻12号, 1925年12月1日, 34頁)

虚無思想とデカダン——巻頭言—— 一夫

死の出發 加藤一夫

文壇のフィリスチニズム 加藤一夫

新文芸の題材と表現 加藤一夫

新過去帳覚書(一) 中浜哲

——菊を喰うた渠

——不死鳥跳躍

吉祥寺より

第13号(第2巻1号, 1926年1月1日, 54頁, 「1周年記念倍大号」)

新年の言葉 加藤一夫

原始に還れ 加藤一夫

『原始』と加藤一夫

森(詩) 加藤一夫
共有林売却 加藤一夫
露の宿から(詩) 大野平凡
勲章 壺井繁治
ダダイズムと構成主義(明日の文芸の考察) 本間巷一郎
新プロ文学に就いて 松村善寿郎
ルンペン知識階級 新居格
我を指して語る 小野十三郎
らんたあん わ・み
大森だより 室伏高信
ソレルとニイチェ 百瀬二郎
吉祥寺より

第14号(第2巻2号, 1926年2月1日, 33頁)

巻頭言——アルツイパーシェフ
エゴイズムと虚無思想——アルツイパーシェフの思想
について—— 加藤一夫
瀕死の青い鳥(詩) 江森盛弥
大事件(詩)
故郷(詩)
土に宿る悲しみ(詩) 関水重雄
村に襲ふ波 河村柳男
政治の意義と本質 新居格
不入斗だより 室伏高信
何を砕かむ 坪田讓治
吉祥寺より

第15号(第2巻3号, 1926年3月1日, 32頁)

巻頭言——ルッソ
虚無思想の肯定性——虚無思想前派・虚無思想・虚無
思想後派—— 加藤一夫
無題 ホッテントット
家(詩) 和田信義
ある詩人の詩(詩) 江森盛弥
私(詩) 細谷源太郎
私・黒旗・彼女と群集(詩) 山川景太郎
夜の道(詩) 関水重雄
太陽と地球(詩)
ニヒリズムの底流——人生の悩みにある人達に送る
——(詩) 安岡黒村
農民詩其他(詩) 留木京之助
自由の宇宙の基礎——ポオル・シル—— 石川三四郎
青龍刀
重農主義芸術につき 芳賀融

雑感 那珂川敏
ニイチェとソレル(1月号より続く) 百瀬二郎
吉祥寺より

第16号(第2巻4号, 1926年4月1日, 38頁)

文壇の政党化 一夫
農民の夢——ノン・パアティザン・リーグについて——
加藤一夫
停らぬ心(詩) 安岡黒村
ある生活の断片(詩) 大野平凡
生の芸術とその変装 加藤一夫
——加藤介春君の眼と眼
——中村孝助君の「土の歌」
通俗, 非通俗の境——「生に寄する波」を読み——
龍田秀吉
徹底自然主義者——アルツイパーシェフと加藤一夫——
河村柳男
施療病院から 本間巷一郎
二等車 吉田武三
思ひ出の日 吉田金重
吉祥寺より

第17号(第2巻5号, 1926年5月1日, 33頁)

巻頭言——メーデーと無政府主義者 フリードリヒ・
ギオバ 新居格訳
桜散る 加藤一夫
彼 進藤遠
死屍の血を奪ふもの 山中映村
墳墓清浄——一幕五場 河東稔
影 荻原四郎
ヘルツェンの生涯 内山賢次
「月夜の喫煙」を読む 加藤一夫
崩壊過程にある文壇 芳賀融
春日漫談 松本淳三
吉祥寺より

第18号(第2巻6号, 1926年6月1日, 38頁)

思想的無力 一夫
新作家推薦 加藤一夫
日本の丘 江森盛弥
ダイナマイト心中 山中映村
田園哀歌(詩) 山本潔
憂鬱のつる日——俺は完全なローマンティストだっ
た——(詩) 遠地輝武

街頭に出る事の意義——西川勉氏の「文学と社会運動」
を読んで—— 松村善寿郎
五十公野君の『農民』 山川亮
手紙 野村吉哉
こんとらちくとら 卜部哲次郎
吉祥寺より

第19号(第2巻7号, 1926年7月1日, 39頁)

文壇の社会的地位 一夫
タマの復活へ——随想録の一—— 加藤一夫
ゆううつの鯉幟(詩) 南沢生一
豚と蚊(ニヒリズム教会一年生の童謡)
アイルランドの生んだプロレタリア新戯曲作家——シ
ー・オ・カツセイのこと—— 加藤一夫
『金』を読む 吉田金重
新しき詩壇の発見と創造 芳賀融
前号の創作 荻原四郎
ものろぎや 辻潤
孤虎ちくとら 卜部哲次郎
旗を振る狂人 壺井繁治
北海道? 大島万世
吉祥寺より

第20号(第2巻8号, 1926年8月1日, 49頁)

紋首台よ——古田大次郎遺著「死の懺悔」より——
生活態度上に於ける虚無思想の応用性——随想録の
二—— 加藤一夫
消費組合と無政府主義 新居格
政治家と蒼蠅 中西伊之助
自由な飛躍を——自由連合の闘士へ——(詩) 平田千
代吉
空腹に迫る淫慾 草野新平
生を凝視するすがた 大野平凡
土を喰ふ 高畑徳雄
CONTRADICTRA 卜部哲次郎
茶話漫談あべこべ集(+) 内藤辰雄
ロマンチックな挿話 レフ・ヤマカフ 山川亮訳
朝 龍田秀吉
古田大次郎獄中記「死の懺悔」読後の印象——諸
家——
純真なる告白に打たる 高島素之
古田君の態度を偲ぶ 布施辰治
此の子此の親 山崎今朝弥
「死の懺悔」を読んで 小野十三郎

「死の懺悔」と「亡父」のこと 本間巷一郎
『死の懺悔』読後に 柳田泉
出版者として 神田豊穂
人間の声 古館清太郎
彼の魂は何を語る 竹内越村
新しい聖書 加藤一夫
吉祥寺より

第21号(第2巻9号, 1926年9月1日, 49頁)

無限の寂寥——「死の懺悔」について—— 江口渙
過去の心(詩) 村松正俊
厭世者の手記(詩) 高群逸枝
——厭世者の手記
——花咲く谷
応接室(詩) 荻原四郎
俺は不愉快だ(詩) 江森盛弥
南京虫の一杯つまった袋の詩(詩) 荻原恭次郎
虚世思想と日本主義の調和の原理 古谷栄一
「僕の思想」といふ事に就て 松本淳三
朝の聖者 野村吉哉
旅窓雑筆 加藤一夫
ものろぎや 辻潤
こんとらちくとら 卜部哲次郎
吉祥寺より 一夫
編輯後記(荻原, 江森, 那珂川, 松本)

第22号(第2巻10号, 1926年10月1日, 35頁)

農村問題の眼目 加藤一夫
泣き叫び泳がう(詩) 高橋新吉
迫害と反抗(詩) 生田春月
手紙死ねり(詩) 多田文三
山焼ける(詩) 大沢重夫
無政府主義者の手帳 新居格
プロ文学を中心にして 芳賀融
こんとらちくとら 卜部哲次郎
空樽の禍 岡本潤
ひと言
予言の街 井東憲
水神ヶ淵 里村欣三
吉祥寺より
編輯後記

第23号(第2巻11号, 1926年11月1日, 40頁, 「創作号」)

妻 高群逸枝

『原始』と加藤一夫

乞食 本間巷一郎

港 堀田昇一

飯場小屋(一幕) 山中映村

屋根裏(詩) 竹内越村

失題(詩) 竹内越村

巨人と死神(詩) 小野十三郎

スネの毛を剃る 広沢一雄

こんとらぢくとら 卜部哲次郎

循環論証の新世界観と錯覚自我説——西洋文化を蹴飛

ばす文献——津田光造

吉祥寺より 一夫

編輯後記 荻原

第24号(第2巻12号, 1926年12月1日, 35頁)

プロレタリアの文芸の回顧と展望 加藤一夫

左傾右傾の日本的意義を擱め 古谷栄一

緑の太陽(詩) 遠地輝武

氷雪の山岳に結晶したい(詩) 千葉勝男

うづく(詩) 石野重道

或る友の手紙に返事する(詩) 江森盛弥

雪はすぐ消えるんだが(詩) 五十嵐久弥

ひとりの思想——野村吉哉君に——(詩) 児玉勉伍

宰相の錯覚 入交総一郎

ある低迷期の一つ 松村善寿郎

左様なら 荻原四郎

吉祥寺より 一夫

編輯後記 荻原

第25号(第3巻1号, 1927年1月1日, 65頁)

巻頭言

無産階級芸術論の根本問題(又は所謂プロレタリア文芸

はブルジョア文芸であるといふ新説) 伊福部隆輝

無政府主義運動史——合衆国に於けるその略史——

新居格

自然発生と目的意識 小野十三郎

プロ文学論批判 芳賀融

愚かな夢(詩) 生田春月

夕日を背に浴びて(詩) 矢口洋三

想像の下に眠らう(詩) 荻原四郎

土の権威 石川三四郎

真正社会学的方法論を確立せよ 大槻憲二

文芸時感——(創作月評)——古館清太郎

農民自治主義の理論——都会中心政治主義のロシア共

産主義の否定——中西伊之助

あぶじひた 卜部哲次郎

一時代 加藤一夫

金魚 坪田譲治

豚禍 江森盛弥

田舎出の女工 高群逸枝

吉祥寺より 一夫

編輯後記

第26号(第3巻2号, 1927年2月1日, 57頁)

巻頭言——クロボトキン, 内山賢次訳『倫理学』より

プロレタリア文学に於ける超個人主義思想の問題 加藤一夫

プロ文芸運動の認識錯誤につき——より正しき文芸運動の展開の序説—— 芳賀融

アナキズム文学小論——二三の誤解に対する検討—— 麻生義

昨日の部屋の入口に立つて戸を閉めろ!(詩) 荻原恭次郎

故郷の匂ひ(詩) 広沢一雄

原始語 伊福部, 芳賀, 荻原生

村松正俊氏の「都会趣味芸術論」批判 伊福部隆輝

あぶじひた(続) 卜部哲次郎

文芸時感——創作月評—— 古館清太郎

一つの立場から 壺井繁治

青野氏に疑を質す——『自然生長と目的意識再論』を讀みて—— 桑島政寿

猛獣使ひ 高橋新吉

四つの古典的な喩 飯田豊二

吉祥寺より 一夫, 振太刀生

第27号(第3巻3号, 1927年3月1日, 59頁)

非協調主義——(ガンヂイ全集より)——

無産文芸の成立と共産派文芸の不成立 村松正俊

文芸運動と文芸 加藤一夫

前衛批判 小野十三郎

都市と地方との近代的対立について 和田伝

原始語

金策と腹痛(詩) 多田文三

自由人(詩) スペイン・ブラースケ・デ・ペドロ 本名隆次訳

文学理論におけるアナキズムとボルセヴィズム 麻生義

咄! 政党文芸——藤森, 林, 小堀, 蔵原の諸氏に与ふ

- 荻原四郎
- 根本問題の根本的認識不足——伊福部君の「無産階級
芸術論の根本問題」に駁す—— 遠地輝武
- 何が彼等をさうさせたか(詩) 江森盛弥
- 読者陣
- 文芸戦線第1回テーゼの解剖 能智修弥
- 認識錯誤者今野氏へ 平田茂
- 寸感 一愛読者
- 蛙蜂 小須田薫
- 文明地獄(詩) 服部豊
- 東京は伝染する 五十嵐久弥
- 呪はれた人々 古館清太郎
- 悲しき家 望月百合子
- 堀 村田千秋
- 人生に就いて 本間巷一郎
- 吉祥寺より 一夫
- 編輯後記
- 第28号(第3巻4号, 1927年4月1日, 61頁)
- 巻頭言——クロボトキン「相互扶助論」より
- 中世主義の文学論——(回顧的風潮を排撃せよ)——
- 麻生義
- 門外漢の見たる無産文芸の問題 八太舟三
- ダダイズムとアナキズム文学の推移及びその観点 萩
原恭次郎
- リゴリストの芸術批評 高橋勝之
- 疲れた奴隷(詩) 大道寺浩一
- 此奴(詩) 野川隆
- 無産階級文学の題材的飛躍 小野十三郎
- 農民文芸の本質について 高群逸枝
- 小説家藤森成吉を葬る 辻本浩太郎
- 正当プロレタリア文学とは? 奈良幸夫
- 馬商人 ジュオルジュ・デュアメル 和田伝訳
- 玉川村から 加藤朝鳥
- こんとらぢーれ 卜部哲次郎
- ボルセヴィズム文芸の崩壊 川合仁
- 崖を登る 壺井繁治
- ボーイスカウトの隊長 和田信義
- 町の骨組 荻原四郎
- 編輯後記
- (経済学部教授)